

## 「企画力・運営力アップセミナー」

### 1 趣 旨

- ・ 主体的に社会に参画しようとしている青年を対象に、事業の企画・運営に関する学びの場を提供することで、リーダーシップや人間関係能力及び問題解決能力などの諸能力を身につけ、将来のリーダーとなるために必要な資質の向上を図る。

### 2 事業の概要

- (1) 期 日 平成 28 年 7 月 1 日 (金) ~ 3 日 (日) 【2 泊 3 日】
- (2) 参加者 26 名 (大学生 25 名、社会人 1 名) ※募集 20 名
- (3) 講師 リードクライム株式会社 代表取締役 西 直人 氏
- (4) 研修内容

1 日目	夜	○オープニング・日程説明・アイスブレイク
2 日目	午前	○講義・演習Ⅰ「頭を柔軟にしよう♪アイデア出しに挑戦」
	午後	○講義・演習Ⅱ「上手に企画を組み立てよう♪企画づくりの下ごしらえ」
	夜	○講義・演習Ⅲ「『こんにちは～さようなら』までのデザイン プログラムデザインを考える！」
3 日目	午前	○講義・演習Ⅳ「企画を立てよう！」
	午後	○講義・演習Ⅴ「ワタシが考えたプログラムは！」 ○振り返り・クロージング・ボランティア登録手続き

### 3 事業の内容

#### (1) 事業の特色

本事業は、全国的に企画や運営についてワークショップを開催したり、講演されたりしている方を講師に招き、企画を立てるときや運営していくときのポイントを学んだり、演習を通して企画・運営のスキルを向上したりすることができる。

#### (2) プログラムデザインと企画のポイント

企画や運営について、講義で一度にたくさんのことを伝えるのではなく、スモールステップで少しずつポイントを確認し、その都度学んだことを使って演習していくことで、参加者が効果的に学びを深めていけるような構成とした。

また、参加者同士が意見や考え、気づき等を出し合い、より良い企画を立てることができるように、演習では基本的にグループでの活動を設定した。

## 4 成果と課題

### 《成 果》

- ・ 例年通り、県内の大学生が多く参加していた中、今まで参加のなかった広島県の大学からも2名の参加があった。広島県の大学・専門学校への広報の成果と考えられる。
- ・ 講師の西直人氏には1日目のアイスブレイクのゲームの中で参加者の実態・ニーズを把握していただいた。今回の参加者は大学1回生が多く、運営についてはほとんど経験やイメージがない状態だったため、運営することよりも企画を立てることを中心に講義・演習の内容を組み立てていただいた。講義・演習でも参加者の様子を観察したり、担当者と相談したりして直前でも内容を変更するなど、柔軟な対応で参加者に合った内容で講義・演習をしていただけたことで、参加者の満足度が高かった。
- ・ グループになっての演習では、とっかかりやすい、興味をもちやすいテーマを導入で使うことで、参加者は自由に思ったこと、意見を伝え合っていた。そのような雰囲気ができてから本題に入ることで、積極的にコミュニケーションをとっている姿が活動全体を通して多く見られた。
- ・ ポイントを絞った講義と、その内容を実践する演習をセットにして、十分な時間を設定されていたため、講義のポイントが理解しやすく、「今まで『企画』と聞くととても難しいイメージをもっていましたが、今回受講しておもしろいものだったと思った。」「学校祭の運営や今後のボランティア活動で学んだこと活かしていきたい。」などの肯定的な感想が多く聞かれた。
- ・ 休憩時間にも関わらず、講師にいろいろと質問したり、話を伺ったりしている参加者の姿が見られ、問題を解決しようという意識の高さを感じた。実際に現在行っているボランティア活動の企画や運営についての悩みを相談している参加者もいた。今回のセミナーに参加したことで、「少し目の前が開けてきた。」と今後の活動に対する意欲を高めていた。

### 《課 題》

- ・ 昨年度は島根県の初任者研修で新任教員の参加があったが、今年度はなかった。また、社会人の参加は1人であった。広報の対象や広報の仕方を見直す必要があると感じている。
- ・ 特に2日目の日程がハードで、朝から夜までの長時間の研修となったため、参加者から「大変だった。」「とても疲れた。」という声があった。集中力を長時間持続することは大変なため、こまめな休憩や夜の研修時間の見直しなど、無理のない日程を考えていく必要がある。
- ・ 全日程をセミナーハウスで行った。研修室での座学による講義がずっと続くよりは床に広げてみんなで活動することができてよかったという声があった一方、机・椅子がなく、床に紙を広げての作業がずっと続いたことも疲労感に繋がっているのではないかという声もあった。次年度は、活動場所についても考えていく必要がある。
- ・ 今回、クロージングの時に、当セミナーの実践の場として、さんべ祭の企画・運営に携わっていく交流の家の教育事業「さんべ夢ステージ」や、自分たちで事業を立ち上げていく際に必要な金額面を助成する「子どもゆめ基金」の紹介をしたが、直接今回のセミナーが次につながっていく形にはなっていない。来年度は、「子どもゆめ基金」をもっと前面に押し出し、企画力・運営力アップセミナーで作り上げた企画を自分たちで運営していけるような仕組みを考えていきたい。

